



子どもの森づくり通信

発行：NPO法人子どもの森づくり推進ネットワーク

J P 子どもの森づくり運動
参加園月例会報
(2019年8月号)

〒146-0082 東京都大田区池上1-3-4 tel:03-5755-3213 fax:03-5755-3081
<http://www.kodomono-mori.net> mailto:info@kodomono-mori.net

「J P 子どもの森づくり運動」とご縁をもたせていただいた方々に、
活動情報をお送りさせていただいております。ご意見など賜れば幸いです。

＜今月の1枚＞



台風10号で被害に遭われた方々に、心よりお見舞い申し上げます。

防災月間をひかえ、今月号では、園で取り組む防災特集をお送りします。

写真は、東京の「春明保育園」で育てられている「東北復興グリーンウェイブ」の苗木です。

都会のど真ん中でも元気に育ってくれています。

(目次)

1. 【防災特集】J P 子どもの森づくり運動がつなぐ防災の絆

2. 事務局からのお知らせ

*「どんぐり博士の育苗日記」～2019年8月号～

■「J P 子どもの森づくり運動」とは

今、子どもたちは、高度な情報化社会の中でバーチャルな環境に取り囲まれ、本物の自然体験活動から遠ざけられています。

しかしながら、子どもたちは、変化に富んだ自然体験活動の中でこそ、五感を通じて豊かな感性や健全な環境意識、そして子ども本来の生きる力を育みます。「J P 子どもの森づくり運動」は、NPO法人子どもの森づくり推進ネットワーク（「子森ネット」）が「日本郵政グループ」との協働体制で、全国の保育園・幼稚園・こども園を拠点に、一貫した森づくり活動を通じて幼児期の子どもたちに自然体験活動と環境学習の場を提供しようという全国運動です。

■「J P 子どもの森づくり運動」運営体制

・運 営：N P O 法人子どもの森づくり推進ネットワーク（「子森ネット」）

・特別協賛：日本郵政グループ

・後援/協力

（公社）全国私立保育園連盟

（公社）大谷保育協会

（公社）国土緑化推進機構

N P O 法人C・C・C富良野自然塾

（一社）日本森林インストラクター協会

N P O 法人自然体験活動推進協議会

N P O 法人MORIMORI ネットワーク

（一社）日本オート・キャンプ協会

（株）実業之日本社 月刊ガルヴィ編集部

保育環境研究所ギビングツリー



1. 【防災特集】JP子どもの森づくり運動がつなぐ防災の絆

9月の防災月間をひかえ、今月号では防災特集をお送りします。本稿は、先のプログラム集につづき、今年度内発刊予定の「**10周年記念誌（理念版）**」に掲載される防災特集のために実施された対談集から、その一部を掲載しました。出席者は、JP子どもの森づくり運動防災アドバイザーの鎌田修広さんと、地域と連携して優れた防災活動に取り組んでおられる「春明保育園」（東京都）の鳴田（しまだ）理事長です。進行は子森ネット清水が務めました。（対談会場：東京都世田谷区「春明保育園」）

【島生活の苦労から掘った井戸】

鳴田：先ほど園庭のビオトープを見てもらいましたけれど、上方に設置したパイプからシャワーのように出ていたのは井戸水なんですよ。3カ所ぐらい掘ったら、うまく水脈に当たってね。



清水：どこに掘られたんですか。

鳴田：園庭の端です。水質検査もして、区に相談して、「震災時井戸水提供の家」（※）という指定井戸の看板ももらったわけ。検査の結果も悪くなかったから、普通に使って大丈夫だけ飲む時は煮沸してくださいと言われています。

「春明保育園」園庭のビオトープ

*「震災時井戸水提供の家」世田谷区では災害時の生活用水確保のため、住民所有の井戸を震災対策用井戸として指定している。

清水：園庭で井戸を掘るって発想は、なかなかダイナミックですね（笑）。

鳴田：私は島で生活したことがあって、その経験が大きいですね。かつて伊豆諸島、小笠原諸島で教育関係の仕事をしていた時、一番大切なものは水なんです。ダムの水が底をつき東京消防庁に応援要請して海水を淡水にする大がかりな装置を運んでもらい生活用水（飲料水も含めて）を確保した経験があります。水が貴重だから天水を溜めて庭にまいたり、雑巾掛けをしたり、生活用水にしたりする中で、改めて生活に一番大切なものは水だと思い知りました。

清水：そういう経験が先生のベースにあるんですね。

鳴田：そう。**人間の生活に必要なのは水、そして、電気と火。**発電機があればご飯が炊けるしね。あとプロパンガス。そうすればとりあえず一時しのぎができるという発想が最初からあったわけですね。小さな子どもたちは暗くなると怖がるから、電気は照明用にして防災倉庫に備えてあります。

清水：多分その延長線上の話になってくると思いますが、鎌田さんが最近“防災キャンプ”を提案されていますが、その基本も今、先生がおっしゃったことに近いですよね。

鎌田：通常の園活動の中ではあまり感じないと思うのですが、園舎で防災キャンプをして一夜過ごしてみると、理事長が今おっしゃった水や電気、火のかけがえのなさに気づかされますよね。被災ってこういうことだったんだ。停電するとこんな感じなんだって。



対談風景

【煙の動きを把握して備える】

鳴田：最近、近くの花屋さんで火災が起きたんです。それで風と共にすごい煙が来た。だから皆を部屋に入れましたけどね。住宅密集地の災害でやっぱり一番気になるのは火事ですね。**天井に昇る煙の速さと、横に行く煙の速さは違うことを鎌田さんから教わりました。**煙はあつと言う間に上昇してしまうので、横に逃げる方が良いんだよね。

鎌田：春明さんと一緒に取り組んだことのひとつが、調理室で火災が発生した場合の避難ルートの検証でした。普段の避難訓練では「煙の回り方について考えたことがない」と皆さんおっしゃっていたので、調理室のすぐ上の保育室や隣の部屋など、各部屋までの距離を実際にメジャーで計って、煙のスピードを計算して、煙の到達時間を割り出しました。すると、真上の保育室には30秒で煙が来る。そもそもいつもの避難訓練のように、抱っこ紐で子どもをくくり付けていたら全く間に合わないことがわかって、皆さんはつとするわけです。極端な話、毛布にくるんでも良いから、廊下の端つこの出口手前まで先に子どもたちを運んでしまえば、煙は横の動きはゆっくりですから、それから抱っこ紐をつけた方が良さそうですね、と話し合いました。きちんと根拠を持って備えることは必要ですね。

鳴田：避難場所もね、これは専門家に聞いたんだけど、鉄道の高架下（「春明保育園」は小田急線豪徳寺駅のすぐ近く）は安全度が高いそうですね。どこも近くの公立学校が避難場所になっていますけれど、この辺りはどこへ行くにも家混みの狭い道を通っていかなければならない。だから場合によっては、高架下のような場所で待機するという選択肢も、私の頭の中にはありますね。



鎌田氏（手前）と鳴田理事長

鎌田：我々も二方向避難ということを常に念頭に置いていますが、選択肢を持っているだけで違いますよね。ないとどうしても避難所に行かなければいけないという先入観に支配されてしまう。

清水：公的な避難場所とは別に、自主的な避難場所を見つけておくことも必要なのでしょうね。

鳴田：公的な避難場所は水やご飯がもらえたりしますから、それはそれで行かなければならぬけれど、そこに到着するまでに事故や災難に遭う危険性もありますからね。

【防災が秘める様々な可能性】

鎌田：防災について、全国どこの園でも言われるが、「やらなきゃいけないのはわかっているのだけど、忙しくてねえ…」、大体そのセリフなんですね。

清水：そうですね。

鎌田：では、実際に取り組んでいる園はどうしているかというと、忙しいから無理とあきらめず、保護者や地域の方に頼んで、取り組みを手伝ってもらっているのですよね。例えば、PTAや親父の会などに「大工仕事が得意な方いらっしゃいませんか？」と呼びかけて、減災対策に周囲を巻き込んでいく。そうやって取り組みを可視化することが今の時代、園の価値や信頼度を上げることにもつながると思うんですね。実は春明さんの防災講習会の最後に、保育士の方たちにサプライズで避難訓練をしていただいたんです。保護者や地域の方々に訓練を見せたことがないとおっしゃっていたので、この機会に見ていただこうと。突然のことで保育士の皆さんには驚かれていましたが、いつも通り臨場感あふれる素晴らしい訓練をされて、拍手喝采を浴びていました。

鳴田：おかげ様で、騒音などに関して近所からの苦情が少なくなりましたね。地域とも一緒に合同訓練をするようになってから、やはり関係性は変わってきたように思います。

鎌田：園が核になってアクションを起こすことで、今度は必ず地域からもお呼びがかかりますので、相乗効果を起こして町が活気づくきっかけにもなりますね。今まで防災は内々にやっていた園が多いと思いますが、今や地域を巻き込む切り口にもなるということです。いわゆる保育三法の新制度の影響で保護者との連携や地域とのネットワークづくりなども求められていますし、地域全体でリスクマネジメントを行っていく方向性も今後ますます望まれるようになると思います。

清水：そもそもはJP子どもの森づくり運動の自然体験活動から防災の取り組みが始まったわけですが、私は子どもが自然体験を豊富に経験することが災害に対する危機意識というか、センサーを育むことにもつながっていると思っています。だから、**自然体験活動からスタートして防災にたどり着いたのも自然な流れと考えています。**

鎌田：むしろ子どもの方が生きる力を持っているとも言えますからね。大人にできることは、「前もってやっていれば助かった…」とならないために、自分の中の面倒くさい、後回しにしたいと思う気持ちと闘いながら、災害に備えたアクションを一つひとつ積み重ねていくことですよね。

清水：今日はありがとうございました。

鎌田さんが進める、園で取り組む防災五つの心得

1. 園長・理事長まかせにしない

★point→防災について年長者まかせにせず、みんなで意見を出し合い、主体性を持って備えるということ。

2. “ちゃんと”備える

★point→消火器設置など法律上の義務を満たすだけでは不十分。災害発生時の具体的なイメージを描いて心配事は一つずつ解決しておこう。

3. 周囲を巻き込む

★point→忙しいからこそ、周囲を頼って備えよう。
園が核となり、保護者や地域をどんどん巻き込んで行こう！

4. 防災・減災対策を“見える化”

★point→防災・減災対策のアピールは、今や園の評判や価値を上げることにつながる。また、取り組みの可視化が自身への鼓舞にもなる。

5. 習慣になるまでやり続ける

★point→地道な対策をコツコツ持続させていくことが大切。続けることで防災が習慣化し、当たり前のこととなる。



2. 事務局からのお知らせ

1) 「園庭緑化運動」モデル事業参加園募集中

園庭緑化事業は、とかく大規模なものとして捉えられがちですが、本プロジェクトでの提案は、まずは子どもたちが育てた地元の“どんぐり”的苗木を植えることから始める手づくりの「園庭緑化運動」です。現在、本プロジェクトの理念にご共感いただき、モデル事業として共にあるべき園庭づくりに取り組んでいただける園を募集します。以下の応募要項をご検討いただき、参加をご検討いただけますようお願い申し上げます。参加ご希望の園は、事務局（子森ネット）までお申し込み下さい。詳細は、個別にご案内させていただきます。



<「園庭緑化運動」モデル事業参加園募集要項>

- ①本プロジェクトの募集は、J P 子どもの森づくり運動参加園を対象とします。
- ②園庭緑化事業について、鶴見大学短期大学部 保育科 仙田考准教授をはじめ「国際校庭園庭連合日本支部」のブレーンによる指導、サポートのもとで行われます。
- ③必要に応じて、事業費を補助する助成金の申請手続きをサポートさせていただきます。（例：「緑の募金」）
- ④サポート体制の事情で、2019年度のモデル事業受付け園数は、先着、3園とさせていただきます。（締切り8月末）
- ⑤本プロジェクトの主体は、あくまで参加園であり、園の希望、事情に沿って運営されます。
- ⑥募集締切りは、2019年9月末とさせていただきます。

2) 子森チャンネルが更新されました。

* 視聴方法：子森ネットホームページ ⇒ 子森チャンネル & 通信 ⇒ 子森チャンネル

* 右のQRコードからもご覧いただけます。



●どんぐり博士の育苗日記(2019年8月号月号)～急務！温暖化対策～

8月20日に放送されたN H K の報道番組で、昨年7月の猛暑と温暖化には因果関係が有るとの最新研究が紹介されていました。子森ネット森林インストラクター：河内和男（どんぐり博士）



N H K の時論公論において、「記録的猛暑・確かに温暖化の影響」という題で放送された内容が画期的でした。毎年の猛暑や異常気象は、温暖化の影響があるのではないかと言われながらも、科学的に因果関係を証明することは難しいとされてきました。しかし、気象研究所と東京大学大気海洋研究所、国立環境研究所などの研究グループは、最新の手法を用い、昨年7月の猛暑と温暖化の因果関係を裏付けたとする報告書をまとめたそうです。

その研究は、スーパーコンピュータによる膨大なシミュレーションを統計学的に分析するものです。温暖化が起こっていなければ、昨年7月のような猛暑が起こる確率は0%となり、どのような猛暑は温暖化が起きていないければ、あり得ないものであったと結論づけているのです。科学的とはいっても一手法に過ぎないので、この番組以外ではまだあまり取り上げられていないようですが、今後は研究手法の進歩と温暖化の進行により、温暖化の影響で起きている、いろいろな事象や異常気象が証明されていくことと思われます。

これは、温暖化など起きてはいないと言い張りたい、経済発展至上主義の方々に対する痛烈な反論となると同時に、温暖化の現状がより深刻であることを私たちに突きつけて来ることになります。

温暖化対策の一助として、二酸化炭素の吸収源や地球の冷却装置となる健全な森林の保護や育成について見識を深め、発信していきたいと思います。そして、J P 子どもの森づくり運動を通じて、厳しい環境の時代を生きていかねばならない子どもたちに、森林の大切さを伝えていきたいと思います。